

歌誌 黄雞「春号」投稿歌

(新仮名)

山形短歌会 黒沼 貞志

歌題 愛妻の日(あゝ さゝ いのひ) (一月三十一日)

眺望の謂れを読めば眼裏に浮ぶ往時の合戦絵巻

天災が人災隠すこともある語り伝えてつなぐは次世代

立夏過ぎこぞの日差しを思い出し植えし流行はやりのグリーンカーテン

御堂へのアジサイの路雨あがり揺れる一枝ひとげを残す

初めてのゴーヤの花の香慎ましき暑さ忘れて妻と語らう

夕間暮れ峰の山肌色萎ゆる斜光一条秋景戻る

忘れ雪「これがそうね」と語らいて重い腰上げ身支度する朝

春隣手袋の穴開くほどに汗を流せり堅雪くずし

夕間暮れ入り日射し入る芒原山辺と野辺を分けてかがよ耀へり

子供らの歓声おちこち春彼岸薄氷を割り花立清めり

三十代われ滞在せし中東は遥か昔の安全地帯

花求む誕生月は寒の雨愛妻の日を知る一月あゝ さゝ いのひ三十一日

荷を置いた園児ら何処と索れば歓声微かに小春日の丘

朱く佇つ鳥居の見守る最上川片方の滝は落ちて凍てつく

岩肌に数多の小銭喰い込めり託す願いに木洩れ陽ゆれて